

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	スキル：・自己を認識する力／自己選択できる力 倫理観：・粘り強くやり切る力 ・表現力 ・挑戦し続ける力 ・コラボレーション力
1.長期欠席者の減少に向けた取組の推進。 2.学力調査結果を分析して具体的な改善策を確認して成果につなげる。	・「学習を通して考えたことや振り返ったことをノートに書く」92.1％(小)、「授業で勉強した事柄をいくつか組み合わせて解く」87.2％(中)と、学んだことを使いながら学習に向き合う児童生徒が増えている。 ・小中ともに児童生徒が自ら動き、生活をよりよくしようとする姿が見られる。 ・「体力づくりに取り組んでいる」の肯定評価が80.8％である。(小)	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子
		中学校区として統一した取組等	・神辺西中学校区でめざす授業の姿を共有（「書く」ことを中心とした「考える」授業づくり） ・児童生徒による生徒指導規程（生活のきまり）の見直しの継続 ・神辺西中学校区における「21世紀スキル&倫理観」に基づく個に応じた指導の実施

Ⅲ 自 校

ミッション	
伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。	
学校教育目標	
自考自動 ―自ら考え、自ら動く―	
現 状	
＜児童生徒＞ ・学力調査における無回答率には改善が見られる。全国学力調査では、全国平均に対して、国語+0.8 算数-0.6 である。課題となる問題の再調査においては目標値を上回った。考えたことを言葉や式で表そうとする態度及び力が少しずつ高まっていると感じる。相手の考えや式の意味を考える力には以前課題がある。 ・「周りの人の気持ちを考えて行動できた」と自己評価する児童は 94.4%である。生活目標に対する振り返りを通して自分達の行動について考えたり、児童同士が互いに肯定的評価を行ったりできた。一方、挨拶の姿に課題がある。 ＜授業＞ ・「書く&考える」内容を具体化する教材研究や、互いの考えの意味を考えたり検討したりする対話的な学びを、さらに進めていく必要がある。	

育成する力 (21 世紀型 “スキル&倫理観”)	自己を認識する力	思考し判断し表現する力	試し、挑む力
めざす 子ども像	・学びや生活を通して自己を振り返ることで、学んだことや良さ、がんばり、課題を実感できる子ども。	・じっくり考え、自分の考えをもつ子ども。 ・互いの考えを伝え合い、対話を通して学ぼうとする子ども。 ・学習や生活の課題に対して、解決の方法を考え行動する子ども。	・学習や生活の様々なことに対して、試行錯誤を繰り返したり、挑戦してみようとしたりする子ども。
研究	テーマ	「書く&考える」学びの実現	
	内容等	「書く&考える」学びを軸に置いた授業 ・「書く」と「対話」を通して、自分の考えを再構成する授業を展開する。 ・「書く&考える」内容を具体化（何を書き、何を考えるか）した教材研究を行う。 ・読みの観点を自覚しながら読み、考えを形成する授業を行う。（国語） ・図・式・言葉を往還しながら考える授業を行う。（算数） ・アセスメントに基づき、授業UD及びUDLを進める。	
めざす授業の姿		「書く」と「対話」を通して自分の考えを整理し、共に学ぶ楽しさを味わう授業。身に付けた既習事項を活用して、新たな課題を解決することのできる授業。	

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力を入れた 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力を入れた 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	「書く・考える」学び を実現する。	★	継 続	児童が考えを 深め、「できた」 「わかった」と 実感できる授 業を実現する。	①「書く・考える」 内容の具体化 →教科への理解を 深めることで、 授業のねらいを 明確にしたり、 指導展開を工夫 したりする。 ②「アセスメント」 に基づく授業づ くり →児童の実態を捉 え、実態から授 業を構成する。	・「何を考え書くか を具体化して、授 業づくり・教材研 究を行っている」 授業者の割合を 80%以上にする。 ・「日々の授業で 『できた』『わか った』と感じる」 児童の割合を 80%以上にする。	□左の質問への肯 定的な回答をし た授業者100% □左の質問への肯 定的な回答をし た児童93.7% 一方で、保護者回 答は86.3%であ り、授業者として 「理解が不十分 である」と見取る 場合もある。	4	4	・「授業改善の視 点」を基に書く/ 考える内容を具 体化する。 【国語】 条件に合わせて書 く・見直す 【算数】 図・式・言葉の往 還、日常生活や生 活経験との結び付 け ・「個別最適な学 びの視点」で授 業改善を行う。 課題への見通し をもち、多様な 選択肢から児童 が自己決定して 探究する。	□重点単元の設定に よる授業改善の視 の明確化や、表現 構想シートの作 成・活用(算数科) を通して授業改善 を図った。 □子ども一人ひと りが自己課題に 応じて学びを進め られるよう、学び を取り多様な選択 肢や場を用意した。 ◎具体的な教材研 究の肯定的回答を した授業者100%。 ◎『できた』『わか った』に対する肯 定的回答は児童が 96.0%、保護者が 90.2%。	4	4	4	・「書く・考える」の 「書く」の在り方 について再考す る。つまり、書く ことで考えを生 む(上→)にあたる 時の「書く」にも、 多様な表現があ ることを再認識 することである。 また、考えたこと を書く(下→にあ たる)時の表現様 式についても、図 や音声など多様 な「書く」を視野 に入れることが 必要である。
1	「書く・考える」学び を実現する。	★	継 続	児童が相手の ことを考え、 自ら行動する ことができる。	①共感的な人間関 係を育成するた めに、毎月1つ の生活目標を設 定し、学級活動 で自らの行動を 振り返る時間を 設ける。 ②段階的に掃除の 在り方を考え、 自ら進んで掃除 ができる児童を 育成する取組を 進める。	・学校全体の生活目 標の達成度を8 5%以上にする。 ・時間いっぱい掃 除をする児童を8 0%以上にする。 (中間:すみずみま で掃除できる児 童。最終:見つけ 掃除ができる児 童)	□「生活目標を守 れている」児童 は73.4%と全 体の4分の1 以上の児童が守 れておらず目標 より低い水準と なった。 □「時間いっぱい そうじをしてい る」児童は、 91.4%と目標 は達成できてい るが最終目標の 見つけ掃除がで きている児童は まだ少ない。	3	3	・児童会から、毎月 の達成度や達成 度の高い学級を 紹介するなどの 放送を行い、児童 の意欲を高めて いく。 ・各学級で、達成で きなかった理由 とどうすれば達 成できるのかを 話し合い、学級全 体で取組んでい く。 ・児童会が見本とな る掃除の仕方を 紹介し、掃除が終 わった児童に見 つけ掃除をする よう指導してい く。	□毎月児童会が、月目標 の意義や振り返りを 放送することで全校 児童が意識して取り 組むことができた。 ◎「生活目標を守れてい る」児童は82.4%と 概ね目標を達成す ることができた。 □児童会を中心に、掃除 の仕方や見つけ掃除 を呼びかけることが できた。たてわり班掃 除を行い、上級生が下 級生にそうじの仕 方を教えることで、だ まって丁寧に掃除を する児童が増えた。 ◎「時間いっぱい掃 除をする」児童は96. 6%と目標を達成す ることができた。	4	4	4	・毎月、生活目標が 変わると継続し て取り組むのが 難しいので、学期 ごとに生活目標 を児童会中心に 立てる。 ・時間いっぱい掃 除をすることは できているので、 隅々まで丁寧に そうじをしたり、 進んで見つけ掃 除ができるよう 指導していく。

4	「書く≧考える」学びを実現する。	★	継続	児童が、積極的に運動に親しんだり、自然と体を動かしたりすることで体力向上を図ることができる。	①積極的に運動に親しむことができるように、全教室にボールやドッジビーなどを配布する。また、自然に体を動かすことができるように校舎内や敷地内に運動の場を設置する。 ②体育の单元ごとに振り返りシートを活用し、毎時間振り返りを書くことで、自己の伸びを見える化する。	・「運動に取り組んでいる」児童の割合を85%以上にする。	□「運動に取り組んでいる」児童は82.6%と目標より低い水準である。休憩時間に運動場に出る児童が少ない。夏にアンケートを実施したため数値が低い傾向にある。 □ドッジビーとソフトバレーボールを各教室に配置し、活用している児童が見られる。 □振り返りシートで自己の成長を見える化できた。单元内の学ぶ順を変更する工夫が必要。	3	3	・10月頃に運動に関するアンケートを再度行う。 ・サーキット運動の内容を見直し、日々の授業において体力づくりに取り組む。その際、多様な運動に触れさせる。 ・自然と動かしやすくなるような仕掛けを学校の敷地内に設置する。 ・振り返りカードで児童が学びの順番や方法を選びながら学習していくことができるようなものに改良する。	□多様なボールを配布し、サーキット運動の一つでもあるバトンスローを設置した。 □体育委員会で遊びの提案を学期に3回程度実施できた。 □振り返りカードを単元で活用することで、自己の伸びの見える化がきたり、思考をみとったりすることができた。 ◎休憩時間にも積極的に体を動かす児童が見られた。 「運動に取り組んでいる」児童は84.4%と概ね目標を達成することができた。	4	4	4	・振り返りカードを活用して、学ぶ順番を自分で決めることができる、動きが分かるような資料をつけたりするなどの改善が必要である。 ・体育委員会を中心に安全面を考慮しながら、運動遊びグッズを作製すると楽しみながら体を動かすことができる。と考える。 ・跳躍力、投球力を向上させる運動をサーキットの中に組み込むなど、改善が必要である。
5	校内や幼保小・中で連携し、教職員一人一人が学ぶ取組を推進する。		継続	幼保・小・中の「学びの繋がり」を意識した連携を図る。	①【小中】「書く≧考える学び」等共通のテーマを設定し実践を進め、互いの授業の参観・協議を行うことで、小中の学びの姿の具体や学びの繋がりを共有する。 ②【幼保小】「ことば・数の学び」等のテーマを設定し互いの授業／保育参観及び協議を行う。子どもの学びの姿や指導／保育の具体とその繋がりを共有する。	・小中合同研修会、幼保小合同研修会を年間2回以上行うとともに、互いの授業や保育の様子を参観・協議する機会を設ける。	□【小中】中学校の授業参観を行い、授業づくりについて交流・協議した。 【幼保小】授業・保育の参観・協議を2回行った。 ⇒幼保小中の学びの姿の具体や繋がりを共有している。 □「書く」を位置付けた学びや、環境構成を意識したことは・数の学びのようにテーマを設定し、研修・実践を進めている。	3	3	・小中連携としては、小学校の授業参観・協議や、学力調査を受けた授業づくりの取組の交流を行う予定である。 ・幼保小連携として、「環境構成」を中心に互いの授業・保育の取組・実践を交流・協議する。 ・合同研修の内容を整理し、教務だよりや教研だより等を通して共有していく。	□【小中】合同研修を2回行い授業を参観、協議した。 ◎「書く」を位置付けた学びに小中が共通して取り組むこと、学力調査の結果を受けた授業改善の方向性等、授業改善について具体的に協議・連携できた。 □【幼保小】合同研修2回に加えて職員による幼保訪問を行った。互いの授業や保育を参観し、協議を行った。 ◎「ことば・数の学び」を引き出すための環境構成について実践の交流、協議を通して、共通の視点で連携することができた。	4	4	4	・今後も共通の観点を持って、授業や保育を考えていく場を設けていきたい。 共通の観点で授業・保育を構想し、子どもの学びや遊びの姿を見ていくこと、そしてそこでの気づきを交流し協議していくことで、幼保小そして中の連携を進めていきたい。

				教職員一人一人の働き方に対する意識の醸成を図る。	①教育目標や「書く&考える」学びに対して各自が自己目標を設定し、互いの実践について交流や対話を繰り返しながら進める。 ②超過勤務45時間以内を目指し、部会や学年会で、見通しを共有し、互いに声を掛け合う。	・職員アンケートにおいて、「時間をつくる工夫をしながら、自己目標に基づいた取組を進めている」職員を80%以上にする。	□教職員アンケートの肯定的回答は、100%である。 □自己目標と自己申告書を関連付けたり、互いの取組を交流する研修を設けたりすることで、一人一人が自己目標に基づき、工夫しながら取組を進めることができた。	4	4	・授業づくり研修や授業研究等の中で、互いの取組を交流・対話、協議したり、自己目標を見直したりする。 ・引き続き、部会や学年会で見通しを共有したり、互いに声を掛け合ったりすることで、超過勤務45時間以内を目指す。	□教職員一人ひとりが自己目標を設定し、実践を進めた。取組を紹介する便りをデータ化して共有、対話による日々の実践交流を行った。さらにはミニ研修(任意の参加)として互いの知識や経験を共有するような研修や、共に教材研究を行う研修などを行い、チームで学ぶことができた。 ◎上記のような学びの場や対話の場の中で、各自が自己の授業を見つめ直し、視野を広げ、実践に取り組むことができた。教職員アンケートの肯定的回答は、96.3%である。また、超過勤務45時間以内の達成度は100%である。	4	4	4	・実践に対する振り返りの機会を充実できるようにしていく。重点単元や自己目標など、設定した目標と照応させて自身の実践・取組を振り返る中で、自己の働き方を見つめ直せるようにしていきたい。 ・業務改善のアイデアを募り様々に試してみることによって、教職員一人ひとりが時間の使い方を工夫し、それぞれが思い描く働き方が実現できるようにしていく。
--	--	--	--	--------------------------	--	--	--	---	---	--	--	---	---	---	---

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。